主題

「大戦争」（二一一・11～12）によって「周囲」（二一一・12）が画一化されていくことに不安を感じ日常を脅かされながらも、言葉にできない何かに希望を託して待ち続ける「私」。

二十歳の「私」は、これまで世間や人と距離をとって過ごしてきた。「言いたくもない挨拶」（二一一・2）や「当たらず障らずのお世辞」（二一一・4）を人と交わし合うことは彼女にとって苦しいもので、それらを避けるためになるべく人と会わずに、つまり「世の中」（二一一・6）とは極力歩調をあわせることなく生きてきた。しかし、そうした彼女の日常は、「大戦争」（二一一・11～12）が始まったことで揺るがされることになる。これまでのように家の中で過ごす居心地のよさに罪悪感を抱えるようになった「私」は、外へ出て駅の改札で誰かを待ってみたものの、自分が誰を／何を待っているのかわかない。自分が「待つ」ものを思い浮かべては否定を繰り返しながら語った先に見つけたのは、「もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの」（二一三・8）であった。それが具体的に何をさすのか、「私」は言語化することができないが、それでも「胸を躍らせて待っている」（二一三・10）のである。彼女にとって「待つ」ことが希望を意味するものであることに注目したい。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め〜P二一〇・2〈分からぬ人を迎えに。〉	「私」は毎日、「誰とも、分からぬ人」（二一〇・1）を迎えに省線の駅に行く。
第二段	P二一〇・3〈市場で買い物をして、〉〜P二一二・2〈失ってしまったのです。〉	買い物の後、「私」は必ず駅のベンチに座って改札から出てくる人を見ているが、皆同じ表情と行動で足早に過ぎ去っていく。「私」は誰を待っているのかわからず、待っているのは人間ではないかもしれないと思う。そもそも「私」はうわべだけの挨拶やお世辞を言って取り繕う世の中や人が怖いのだ。だから誰にも会わず家で母と縫い物をする時間を大切にしてきたが、「大戦争が始まって」（二一一・11〜12）周囲の緊張感が増すなか、自分だけが周囲（世の中）とは異なることに不安を感じて「お役に立ちたい」（二一二・1）と思うようになる。
第三段	P二一二・3〈家に黙って座って〉〜P二一三・1〈燃えているような気もする。〉	「私」は落ち着かず外へ出たものの、行くあてもないので毎日駅に立ち寄っている。そんな自分の前に誰かが現れる期待と恐怖が入り混じり、「お役に立ちたい」（二一二・13〜14）というのは口実で、「不埒な計画」（二一二・16）を胸に秘めているのかもしれないと思うようになる。
第四段	P二一三・2〈いったい、私は、〉〜P二一三・7〈おお、嫌だ。〉	「私」は何を待っているのか、「はっきりした形のものは何もない」（二一三・1）。「旦那さま」や「恋人」「友達」「お金」「亡霊」（二一三・6〜7）など、次々と「私」のなかに浮かぶが、そのどれも違う。
第五段	P二一三・8〈もっと和やかな、〉〜終わり	「私」が待っているものは言語化できないが、胸を躍らせるような期待に満ち溢れたものである。周囲の雰囲気に埋もれてしまいそうな日々の中で、それでも「私」は一心に待ち続ける。その自分の姿を「あなた」（二一三・14）にも覚えておいてほしい。